

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

翻訳訳語辞典を公開しています  
文章に携わる人のための辞書・検索サイト  
DictJuggler.net (<http://www.dictjuggler.net/>)

## 目次

### ■ 翻訳講義 (2)

山岡洋一

#### 一 翻訳者は執筆者

フランクリン・ローズベルト大統領の第1期就任演説をテーマにして、翻訳について考えていく。まず、じつに単純な問題として、表記の基準を守るという点を取り上げる。つぎに、翻訳にあたって、分かっていないことを書いてはならず、分かるまで調べてから書くという原則を取り上げる。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

(@は半角文字に変えてください)

**定期講読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 翻訳者は執筆者

今回からは、フランクリン・ローズベルト大統領の第1期就任演説をテーマにして、翻訳について考えていきます。

いくつか前置きがあります。第1に、かなり難しいを翻訳してもらった理由です。翻訳の演習では、やさしい文章を訳してもらおう方法もあります。それで優れた翻訳ができれば自信がつき、もっと難しい文章に取り組んでみようと思えるようになるかもしれません。ですが、皆さんの実力を考えれば、そんな方法が必要だとは思いません。頭をなでてもらったり、花丸をつけてもらったりする必要はないはずです。難しい課題に取り組んで、頭が痛くなるまで考え抜く。そういう経験を積んだ方が、将来、役立つはずです。ですから、とんでもなく難しいわけではないが、かなり難しい文章を教材に使っています。

第2に、添削をしてほしいという意見があるでしょうが、添削はしません。どこに問題があり、どこはいいかを示すだけにします。今回提出された訳文のうち、とくに優れているものを選んで、問題点を指摘しました（次ページ左下図を参照）。傍線が入っているのが問題のある箇所です。今後、同じ文章の翻訳を何度か改定してもらいますが、その段階には、優れている箇所を波線で指摘するようにします。

なぜ添削をしないのか、理由を説明します。たぶん、ピアノやバイオリンなどを習っているか、以前に習っていた人が多いでしょう。その場合、いま練習している曲は将来、何度もひく機会があるということが少なくないはずで、そうであれば、間違いを指摘してもらい、もっとうまくひけるようにしておくことには意味があります。しかし翻訳の場合は、事情がまったく違います。今後何十年か毎日、翻訳を行っていくことになったとしても、同じ文章を訳す機会はまずないのです。ですから、今回の課題の正しい訳し方を覚えたとしても、役立たせる機会はないのが普通です。正解を聞いても、役には立たないのです。そこで、この講義では、問題点を見つけ出し、もっとよくするにはどうすればいいのかだけを指摘する方法をとります。添削をしない理由はもうひとつあります。わたし自身、正解が分かっ

ないという理由です。正解が分からないというと、ではなぜ翻訳の講義をしているのかと思われるでしょうが、翻訳とはそういう性質のものなのです。翻訳には正解はありません。いま、翻訳家10人がこのローズベルトの就任演説を訳したとすると、10通りの翻訳ができ、それぞれかなりの違いがあるのに、どれもいうならば「正解」だということもあるでしょう。翻訳は、入試の問題とは違って、ひとつの正解があるようなものではないのです。

課題文の翻訳に取り組んで、どうしても分からない点や不安な点があれば、正解を知りたくなるのは当然でしょう。ですが、世の中のたいていの問題がそうであるように、翻訳には正解はないのです。正解がない問題を考えるのは苦しいともいえますが、逆に、正解がないから楽しいともいえます。正解がないから奥が深く、一生をかけて学んでいく価値があるのです。皆さんには正解のない世界の楽しさを味わってほしいと願っています。ですから、正解は何かと質問しないようにお願いします。

### 縦書き文書の書き方

まず、じつに単純な問題を取り上げます。表記の基準を守るという点です。翻訳者は執筆者ですから、執筆者としての常識を知っておく必要があります。以前は、原稿用紙の使い方をうるさく指導されたものですが、いまでは原稿用紙を使う人はめったにいませんから、パソコンでの文書の作成法というべきでしょう。今回、縦書きの書式を使ったのは、たぶん、縦書き文書の書き方になれていない人が多いだろうと考えたからです。縦書き文書の書き方を心得ていないと、いくらすばらしい翻訳を行っても、一目で素人と分かる表記になっているのは、仕事はもらえないと思います。

縦書き文書の書き方で間違いやすい点があります。第1に、縦書き文書では通常、段落の最初の行を1字下げにし、段落と段落の間に空白行はおきません。原文はこの場合、パラグラフの最初の行にインデントはなく、パラグラフとパラグラフの間に空白行がありますが、日本語の縦書き文書でこれと同じにすることはめったにないと考えておくべ

きです。

この点は、縦書き文書の目的を考えれば、すぐに分かります。縦書きにするのは、新聞雑誌や書籍に使うからであることが多く、新聞や雑誌、本をみれば、段落の最初の行を1字下げにし、段落と段落の間に空白行をおかないのが普通であることが分かるはずです。パソコンで文書を作成するのであれば、印刷されたときの形になるべく近づけておくのが正解だと思います。たとえば出版用の翻訳のときには、編集者にレイアウトを聞いておき、なるべくそれに合わせます。たとえば1行42字で1ページ18行なら、それと同じ字数と行数で印刷し、チェックします。そんなことまで考えるわけですから、当然、段落の最初の行は1字下げにし、段落と段落の間に空白行はおかないようにします。

ここで注意しておくべき点があります。出版では通常、段落の最初の行でも、カギ括弧ではじまる時は、1字下げをしません。新聞ではカギ括弧ではじまる時も、1字下げをするのが普通ですが、また、インデントではなく、1字下げを使います。つまり、全角1字分の空白を入力します。ワープロ・ソフトには親切というよりお節的な機能がたくさんついていて、空白を入力したはずなのに、インデントになっている場合がありますので、注意が必要です。ワープロ・ソフトを使うのであれば、お節的な機能をすべてオフしておくべきです。それよりいいのは、入力の際に、たとえば秀丸などのエディター・ソフトを使うことでしょう。ワープロ・ソフトは最後の仕上げと印刷だけに使えばいいのです。

第2に、縦書きでは数字に漢数字を使うことにも注意しておくべきです。横書きでは半角の洋数字、縦書きでは漢数字が基本です。最近はこの原則が若干崩れています。大手の新聞社が縦書きの記事に洋数字を使うようになったためですが、個人的な意見

をいわせてもらうなら、これはとんでもない邪道だと思います。縦書きの数字は漢数字でなければならぬ、洋数字を使うと美しくならないと考えます。漢数字の使い方にも注意が必要です。一例をあげるなら、二〇〇八年十二月という風になります。二千八年ではないし、一二月ではないのです。金額の場合なら二千八円が普通です。

第3に、これと関連する点ですが、固有名詞などを原文のまま表記する人がいますが、これはやめるべきです。略語の場合にはアルファベットを使いますが、半角ではなく、全角を使います。

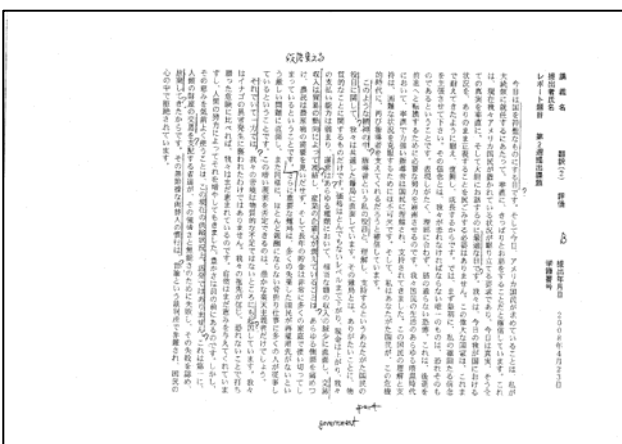
第4に、句読点の使い方でも若干注意すべき点があります。カギ括弧閉じるの前に句点は入れません。文部科学省ではカギ括弧閉じるの前に句点を入れることにしていますので、小中高の教科書ではそうなっていますが、文部科学省の管轄でないところ、たとえば出版などでは、この方法はほとんど使われていません。作家のなかに何人か、この方法を使う人はいますが。また、疑問符と感嘆符の後には一字分の空白をおくのが普通です。ただしカギ括弧閉じるの前に疑問符か感嘆符がある場合は例外です。

ほかにもまだ注意すべき点がありますが、いちばんいい方法は、信頼できる本や新聞・雑誌などでどのような表記方法が使われているかを調べてみることです。上記の点以外にも、たとえば漢字と仮名の使い分けなど、学べる点がたくさんあるはずです。

表記の基準や用字用語は物書きにとって悩みのタネですから、そのための本もたくさんできています。定評がある本をひとつだけ紹介しておきます。『記者ハンドブック』（共同通信社）です。これは新聞用のハンドブックですから、たとえば出版の場合とは少し違っている部分もあり、注意が必要です。じつは、日本語の場合、正しい表記の方法とか、正しい用字用語とかが決まっていないという問題があります。「たとえば」と書いても「例えば」と書いても「例へば」と書いても間違いではありません。句点や読点をどう使ってもいいのです。最終的には執筆者に任されています。執筆者は表記の方法や用字用語を自由に選べるのです。自由とは責任をとるわけですから、翻訳を行うときには、表記や用字用語を十分に考える必要があります。

## 翻訳の原則

表記の問題はこれぐらいにして、訳文について気



づいた点を指摘します。まず気づくのは、理解しないで書いている点が少なくないということです。原著者が具体的に何をいおうとしたのか、理解しないまま、訳文を書いていることが多いように思えるのです。そう思える場合が多かった表現をあげておきましょう。

a day of national consecration  
nameless  
leadership  
on my part and on yours  
concern  
values  
government of all kinds  
means of exchange  
currents of trade  
thousands of families  
in the very sight of the supply  
rulers of the exchange of mankind's goods  
money changers

たぶん、理解しないまま訳文を書いているという

と、心外に思う人が少なくないはずですが、分かったから書いているのだと。しかし、このときに分かったのは訳語であって、意味ではないという場合が少なくないはずですが。翻訳にあたっては、訳語が分かっただけではだめです。意味が分からなければいけないのです。具体例をあげましょう。

たとえば、*thousands of families* では「数千もの家庭」「何千もの家族」などの訳がかなり多かったのですが、原著者はこのとき、ほんとうに「数千」「何千」と考えていたのでしょうか。これは 1933 年 3 月にフランクリン・ローズベルトが大統領に就任したときの演説です。当時、アメリカの人口がどれだけあり、世帯数がどれぐらいだったかを調べ、大恐慌の最悪期だった当時の状況を調べてみれば、数千という数が信じられないほど少ないことにすぐに気づくはずですが。この時期には、文字通り「何千もの」銀行が破綻し、預金者が預金を失っていたのです。ですから、「数千もの家族」「何千もの家

#### INAUGURAL ADDRESS OF FRANKLIN DELANO ROOSEVELT

Given in Washington, D.C.

March 4th, 1933

This is a day of national consecration, and I am certain that on this day my fellow Americans expect that on my induction into the Presidency I will address them with a candor and a decision which the present situation of our people impels. This is preeminently the time to speak the truth, the whole truth, frankly and boldly. Nor need we shrink from honestly facing conditions in our country today. This great Nation will endure as it has endured, will revive and will prosper. So, first of all, let me assert my firm belief that the only thing we have to fear is fear itself—nameless, unreasoning, unjustified terror which paralyzes needed efforts to convert retreat into advance. In every dark hour of our national life a leadership of frankness and of vigor has met with that understanding and support of the people themselves which is essential to victory. And I am convinced that you will again give that support to leadership in these critical days.

In such a spirit on my part and on yours we face our common difficulties. They concern, thank God, only material things. Values have shrunk to fantastic levels; taxes have risen; our ability to pay has fallen; government of all kinds is faced by serious curtailment of income; the means of exchange are frozen in the currents of trade; the withered leaves of industrial enterprise lie on every side; farmers find no markets for their produce; and the savings of many years in thousands of families are gone.

More important, a host of unemployed citizens face the grim problem of existence, and an equally great number toil with little return. Only a foolish optimist can deny the dark realities of the moment.

And yet our distress comes from no failure of substance. We are stricken by no plague of locusts. Compared with the perils which our forefathers conquered because they believed and were not afraid, we have still much to be thankful for. Nature still offers her bounty and human efforts have multiplied it. Plenty is at our doorstep, but a generous use of it languishes in the very sight of the supply. Primarily this is because the rulers of the exchange of mankind's goods have failed, through their own stubbornness and their own incompetence, have admitted their failure and have abdicated. Practices of the unscrupulous money changers stand indicted in the court of public opinion, rejected by the hearts and minds of men.

族」という言葉は、理解した内容を表現したのではなく、**thousands of families** という言葉を深く考えることなく、機械的に訳した結果であることが理解できるのではないのでしょうか。

もうひとつ、**nameless** の例を考えてみましょう。これは **nameless ... terror** と続くわけですが、「名もない……恐怖」といった訳がかなり目立ちました。「名もない恐怖」というのはどういう恐怖なのか、読者は理解できるでしょうか。たぶん、これを読んだ読者のほとんどは理解できないと思います。読者のほとんどが理解できないとすれば、書いた本人、つまり訳した人が理解できていなかったからと考えるのが普通でしょう。

ここで、翻訳の重要な原則を確認しておきたいと思います。翻訳の重要な原則はこうです。「翻訳にあたって、分かっていることは書かない。分かるまで調べてから書く」

翻訳とは、原著者の立場に立って書く作業です。翻訳者は原著者の代理人です。いま訳しているのは演説ですから、原著者であるフランクリン・ローズベルトが何らかの理由で演説ができなくなり、自分が代わりに演説することになったと考えてみる。そのとき、理解できていないことを話そうとは考えないはずです。たとえば、「何千もの家族が長年の貯蓄を失っています」といったとき、「何千もの銀行が破綻して、預金が戻ってこない状況になっているのに、貯蓄を失った家族が数千というのは、愚かな楽観主義者だというべきではないでしょうか」と質問されたら、どう答えるのでしょうか。答えることができないのであれば、原著者の代理の役割は果たせません。

前回、英文和訳と翻訳の違いを以下のように指摘しました。

英文和訳と翻訳でどこが違うのかは、今後、課題文を訳していくなかで、具体的に考えていきます。ここでは、原則を示しておきます。英文和訳では、単語や連語、構文などを決まった訳し方を使って、一対一対応で訳していくのに対して、翻訳では、原文を読み、調べ、理解し、理解した結果を日本語で書いていきます。

原文に **thousands of families** とあるから、「何千もの家族」と訳しておけば大丈夫だろうと考えるのが英文和訳、ほんとうに何千なのだろうかと考え、調

べて、どう書くかを決めていくのが翻訳なのです。

## 翻訳の基礎は理解

翻訳の基礎は理解です。読み、調べ、理解し、書くのが翻訳です。まず、原文を正確に読む。これが翻訳の第一歩です。構文をしっかりとつかみ、語句を確認します。

次に分からない点や不安な点がどこなのかを確認し、理解できるまで徹底して調べます。語句の意味は、まずは辞書で調べますが、翻訳にあたっては紙の辞書を使うべきです。電子辞書やインターネット辞書では翻訳はできないと考えておくべきです。辞書を買うときは大きい秘書を買えといわれています。たとえば英和辞典なら、大辞典を買うべきです。2万円近くの価格は高いと思えるかもしれませんが、何年もの間、毎日何回となくひくことになると考えれば安いものです。

不安な点、自信がない点がどこなのかを確認することがとても大切です。たとえば、**thousands of families** というのは中学生レベルの単語が並んでいるだけですが、不安になれば辞書で **thousand** の意味を調べてみようと思うはずですが、そう思えば、もう問題は大部分解決しています。中学生ではないのだからと思えば、問題は解決しません。

上にあげた点は、辞書でしっかり確認すべきでしょう。ここでとくに難しいのはたぶん、**a day of national consecration** でしょう。これは辞書では解決しないかもしれません。ヒントをひとつだけ。ここで、**my consecration** ではなく、**national consecration** であることに注意してください。

これは大統領就任演説ですから、格調の高い演説にしようとしています。格調の高い文章を書こうとすると、少し古い言葉を使ってみようとするのはありませんか。この点は英語でも変わりません。ここで使われた古い言葉として有名なものは、**money changers** でしょう。普通はこうはいいません。他にも同様の例がいくつかあります。

もうひとつ、この部分には有名な言葉があります。ローズベルトの言葉としてこれ以上はないほど有名な言葉です。それは、**the only thing we have to fear is fear itself** です。決めぜりふですから、それにふさわしい訳し方をしてください。